令和７年度創造都市政策セミナー　開催報告

【全体概要】

□令和７年度の政策セミナーは、３年に１度開催される現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭 2025」の秋会期に合わせて、代表幹事である香川県高松市において、２日間の日程で開催した。

□CCNJ 会員からの要望の多かった「こどもに対する文化芸術の取組」をテーマとし、高松市で実施されている「芸術士派遣事業」について、開始した当時のお話なども含めて基調講演でお話いただき、パネルディスカッションではこども向けの取組を進められている３市の皆様にご登壇いただき、その取組や事業内容等をご紹介いただいた。

□政策セミナー後には、交流会やエクスカーションも合わせて実施した。

【政策セミナー】

開催日時	令和７（2025）年 10 月 16 日（木）15:30～18:00
開催方法	高松市（サンポートホール高松　第２小ホール） 及びオンライン（ハイブリッド開催）
主　　催	高松市
共　　催	創造都市ネットワーク日本（CCNJ）、文化庁
参加人数	72 名
参加自治体・団体数	自治体：31、団体：1
プログラム	□開会挨拶 ・大西秀人氏（高松市長） ・武藤高之氏（文化庁 参事官（生活文化創造担当）） □基調講演「こどもに対する文化芸術の取組」 ・三井文博氏（NPO 法人アーキペラゴ 代表理事） ・田中克幸氏（元高松市健康福祉局長） □パネルディスカッション「こどもと創造都市」 ／モデレーター ・田野　智子　氏（NPO 法人ハートアートリンク 代表理事） ／パネリスト ・高松市：平井省三氏 （高松市創造都市推進局 文化・観光・スポーツ部 文化芸術振興課 課長） ・神戸市：加藤慧氏 （デザイン・クリエイティブセンター神戸 企画事業部門 マネージャー） ・金沢市：木村健氏 （金沢 21 世紀美術館 交流課 課長／チーフ・エデュケーター）

	□総括 ・佐々木雅幸氏（大阪市立大学名誉教授／CCNJ 顧問）

【プログラム概要】

1．　基調講演「こどもに対する文化芸術の取組」

／三井文博氏（NPO 法人アーキペラゴ 代表理事）

田中克幸氏（元高松市健康福祉局長）

■芸術士活動とアートによる地域連携の取組について

・「アーキペラゴ」は 2009 年に瀬戸内国際芸術祭の準備を担うために改名・設立。「多島海」という意味を持つ名前の通り、多様な島々の個性が光る社会の実現を目指している。

・高松市は、庵治石や盆栽、漆芸など伝統産業が根付く文化都市であり、芸術をまちづくりの軸に据えたユネスコ創造都市への参加も検討している。市内には、イサム・ノグチ氏や猪熊弦一郎氏、川島猛氏など、子どもや地域社会に開かれた芸術を目指した作家の美術館などもある。

・こうした地域の文化的土壌を背景に、芸術を教育とつなげる新たな仕組みとして「芸術士」制度を構想し、2009 年にアーキペラゴが高松市に提案して、2010 年の瀬戸内国際芸術祭にあわせて実証が始まった。

・芸術士構想の根底には、イタリアのレッジョエミリアの教育理念がある。この教育の思想を体現するのがロリス・マラグッチの詩「子どもの百の言葉」である。子どもは多様な方法で世界を表現できるが、大人はその可能性を奪ってしまいがちだという内容であり、芸術士活動はこの考えを基盤としている。戦後の混乱期に市民が廃材を売って学校を建て、子どもの創造性を尊重する教育を始め、芸術を通じた学びの可能性に共鳴して構想に取り入れられた。

・初回の活動は 2011 年、多肥保育所で実施された。紙筒を使い、風の通り抜ける音を聞くことから始め、子どもたちが自由に動かし音を感じ取る様子が観察された。

・芸術士は、保育や教育現場で子どもの表現を支援し、創造力や想像力を引き出す専門家である。活動の基本原則として、①子どもの表現をサポートする、②「なぜ・どうして」の気持ちを大切にして答えを急がない、③結果よりも過程を重視する、④子どもの可能性を社会に伝える、の 4 点を掲げている。

・竹の子の絵を「同じように描かせる」従来の教育への疑問があり、芸術士は「自由な表現」を重視するようになった。例えば、生のイカを観察して描く活動では、形や質感の違いを子どもが感じ取り、独創的な表現が多数生まれた。

・その他にも、水に浮かぶカプセルで色と光を探る「水遊びプロジェクト」や、森を散歩しながら浮かんだ変な生き物の絵をまとめた「変な世界図鑑」など、子どもの想像力の豊かさに園長が驚くこともあった。保育園だけでなく、高齢者施設や支援施設など、地域の中での活動も行っている。

・活動成果として、地域鉄道「ことでん」の駅構内に子どもたちの作品を常設展示するな

ど、まちの中に子どもの作品を展示する仕組みづくりができ、10 年以上続いている。
・保育士、保護者、芸術士の三者の関係性は、子どもたちを囲むトライアングルのようなものであり、芸術士は中導的に並走するのが役割と考えている。

■行政による導入の経緯と課題
・事業導入にあたっては、行政側でも芸術を福祉分野に導入することへの戸惑いがあった。特に、芸術士の活動が既存の保育カリキュラムにどう位置づけられるか、資格や雇用形態をどう設定するかが初期の課題となった。
・これに対し、市とアーキペラゴが協議を重ね、リーマンショック後の緊急雇用対策事業を活用することで制度を整えた。瀬戸内国際芸術祭のボランティアとして応募があった方々にも声を掛けながら、芸術系大学出身者や地域アーティスト 8 名を採用し、約 25 園を対象に試行を開始した。
・活動開始に際しては、園長や保育士の理解を深めるため、レッジョアプローチの研究者である東京大学・秋田清美教授の講演会を開催。また、開始前に保育園と芸術士の面談を行い、理念を確認するとともに、初めの 3 か月は芸術士が子どもたちと遊びながら観察し、子どもたちが本当にやりたいことサポートする必要性を実感する期間となった。
・当初は、芸術士の立場やその活動の位置づけなど、保育士の方々の不安も大きかったため、事務局も交えた定期的なミーティングの機会なども制度化し改善していった。
・緊急雇用対策事業は 3 年間で、その後は市の自主財源に切り替える必要があった。予算申請のために定量化できる情報として、保護者と保育士にアンケートを取った。その結果、非常に良かったが 60%、良かったが約 35%程度と好評であり、継続希望や回数の拡大希望もあった。保育士からは気づきの機会になるとの意見があり、保護者からも子どもがとても楽しみにしており継続してほしいとの要望があった。また、瀬戸内国際芸術祭があり、アートシティ高松として展開したい背景もあった。費用対効果を示すことは大変難しいが、子どもの自主性や自己肯定感が高められたと考えている。
・各自治体での導入を検討される場合は、子どもの成長に関するバックデータやエピソードを集め、現場の熱意を伝えて実現してほしい。
・今後の自走の可能性については、芸術士の一人が保育所に就職したが、各保育所に芸術士がいる状況になることが理想だ。アーキペラゴは自律・協調・分散という方針で運営しており、分散していくことは望ましいが、互いに高め合い、協力して問題を解決できるように芸術士協会を作り、芸術士という資格も作った。

2．パネルディスカッション「こどもと創造都市」

／モデレーター

田野智子氏（NPO 法人ハートアートリンク 代表理事）

／パネリスト

高松市：平井省三氏

（高松市創造都市推進局 文化・観光・スポーツ部 文化芸術振興課 課長）
神戸市：加藤慧氏
（デザイン・クリエイティブセンター神戸 企画事業部門 マネージャー）
金沢市：木村健氏
（金沢 21 世紀美術館 交流課 課長／チーフ・エデュケーター）

・まず、高松市・神戸市・金沢市の 3 都市から、各都市の地域特性を生かした、子どもたちの創造力を育む多様な取組が報告され、その後、意見が交わされた。

■高松市の取組
・2012 年に創造都市推進局を設置し、「こども」「工芸」「食」「交流」を中心とした創造性豊かな都市づくりを推進している。
・2016 年開設のこども未来館「高松ミライエ」では、体験型イベントを通じて創造力を育成している。
・こうした活動の評価により、世界大手の旅行予約サイトの「2020 年に訪れるべき目的地 TOP10」に国内で唯一選出された。
・課題として、人口減少や文化継承者の不足が挙げられ、第 3 次高松市創造都市推進ビジョンでは「独創・未来・世界」を基本方針に、すべての世代が創造活動に関われる環境整備を目指している。
・基本方針 1「独創」の事例について。ハンセン病療養所のある大島を舞台とした「アーティスト・イン・レジデンス」事業では、小中学生がアートを通して歴史や人々の記憶を学び、差別などの問題を自分ごととして考える教育的機会としている。
・基本方針 3「世界」の事例について。「高松国際ピアノコンクール」では審査員や入賞者による学校訪問演奏を実施。世界の音楽家との出会いを通じ、子どもの夢や創造意欲を育てている。他にも、官民連携による街中での演奏会や福祉施設での音楽イベントも行われ、音楽と社会包摂を結ぶ文化政策として定着している。
・現在、ユネスコ創造都市ネットワーク（音楽分野）への加盟申請を進めており、音楽と地域文化を融合した高松独自の創造都市モデルの確立を目指している。

■神戸市の取組
・デザイン・クリエイティブセンター神戸(愛称：KIITO)は旧生糸検査所をリノベーションした施設で、2008 年のユネスコ創造都市（デザイン分野）加盟を契機に開設された。
・子どもの創造性教育の実践「ちびっこうべ」は、子どもがクリエイター(シェフ・建築家・デザイナー)と共に“夢のまち”をつくる参加型イベントで、2 年に 1 度開催している。講師となるシェフや建築家、デザイナーらとともに、15 人のグループで夏休みから 10 月にかけてワークショップを行い、飲食店の建物などを企画・運営する。事前ワークショップに参加する子どもが 150 人、サポーターやクリエイターなどを合わせ

て 400 名以上で活動している。

・夢のまちオープン当日、事前ワークショップに参加した子どもたちは自分たちでつくった飲食店を切盛りする。当日のお客さんになる子どもたちは、ハローワークで仕事を探し、郵便局やラジオ局、警察署などで働き、地域通貨「キート」をもらい、それを使って食べものを買ったりプログラムに参加したりする経済活動を体験する。

・関わるクリエイターやサポーターには、子ども自身の発想を尊重する「ちびっこうべ憲章」という運営方針を徹底している。プロの知識を学び、共創体験による達成感が得られる場として、高い評価を得ている。

・参加経験が進路選択に影響する例もあり、過去の参加者がサポーターとして運営に関わるなど、継続的な循環も生まれている。しかし、参加したい子どもが多いために起こる問題や、協力いただくクリエイターやサポーターへの負担の大きさなどの課題もある。

・このイベントから派生した連携イベントも生まれてきている。

■金沢市の取組

・金沢 21 世紀美術館は都市計画の中で生まれた美術館で、「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目指して開館した。「市民とつくる」「子どもたちとともに成長する」ことを理念の中に持っており、建築は円形ガラス張りの設計で、まちに開かれた構造になっている。中と外、人と人が交わる場として機能している。

・教育普及事業では教育委員会と連携して実施している。市内の小学 4 年生全員を対象にした「ミュージアム・クルーズ」では、数人のグループごとに感想などを話しながら美術館を「探検」する。ボランティアは解説ではなく対話の伴走者として子どもと共に展示を体験する。

・中学生には部活動と連携し、制作体験と展覧会を行う「中学生まるびぃアートスクール」を実施。高校生には演劇部を通じて個人に呼びかけ、ステージプログラムを紹介している。

・もう一つの軸はこどもと家族連れ向けの造形プログラムで、平日は乳幼児向け、休日は小学生向けに分けて用意している。「キッズスタジオ」では展示作品に刺激を受けながら自由に表現を楽しむ活動が行われている。

・今後については、“社会包摂型美術館”の機能強化を目指し、一例として 2024 年度には障がいの有無や年齢を問わず多様な人々が参加する演劇を実施している。

■活動の中で大人が気づかされたこと

【神戸市】

・大人が入れないイベントとしたことで、逆に親子の会話が増えたという声をよく聞く。また、子どもに対するイメージが変わり、創造性の豊かさに気づかされた。

【金沢市】

・鑑賞については、それぞれの子どもの視点や感想が異なることで、大人の鑑賞ボランテ

ィアも気づかされることが多い。家族連れでの造形プログラムも、年令により作品の出来不出来の差が出るのではなく、子どもも大人もそれぞれの個性をお互いに楽しめるように、題材選びなどを工夫している。

【高松市】

・固定概念から外れた新しい発想があり、新鮮な感覚を思い出させてくれる。

■活動に対する地域での評価

【神戸市】

・神戸の未来を考える上で「ちびっこうべ」は今後も続けていくべき事業だと考えている。

・長期間にわたり協力いただいたクリエイターやサポーターとの信頼関係ができており、その後もさまざまな事業で協力していただいている。「ちびっこうべ」に興味関心のある団体個人からの問い合わせに対しては、ノウハウをお伝えしている。

・過去に参加した子どもたちが成長し、高校生、大学生、社会人となり、サポーターとして運営に関わってくれている。

・評価軸の作り方や、成果が現れるまでに長い年月が必要なことが難しい。保護者の意見は聞けるが、小学 3 年生などの子どもにとっては言語化が難しく、アンケートでは「楽しかった」など短絡的なものになってしまう。10 年以上続けることで、参加した子どもたちが大人になり「とても影響を受けた」と語るようになり、建築家やパティシエを志すなど、将来的にクリエイター側として戻ってくる可能性が出てきた。そうした長期的な視点が重要だ。

・地域の高齢男性を対象にした「パンじぃ」プロジェクトも 10 年続いており、プロから学び、パンづくりの技術を身につけた高齢男性が子どもにパンづくりを教えるようになり、こうした「循環」が地域の力になっている。

【金沢市】

・小中学校とのプログラムは教育委員会を通じて行っており、成果の記録集なども市内の小中学校などに広く配布・掲示している。また、金沢市の中心市街地に設置した施設であり、兼六園と繁華街の間に立地しており、活動が目につきやすいという強みがある。

・また、金沢市内の取り組みでは、海に近い地域での文化活動の拠点づくりや、子どもたちのアート工房設立など、新しい動きも始まっている。

・授業の一環で来館した地元の小学生には、先生方が当日中にアンケートを配布して感想を聞かせてもらえている。かつて来館した子どもが大学生になって、鑑賞ボランティアとして応募してくれる例も増えており、10 年以上経ち戻ってきてくれることが喜びだ。

【高松市】

・文化芸術の分野では、数値化や成果指標で表すことが難しい面があるが、アンケートなどによる感覚的な評価や満足度・好感度といった形でのフィードバックを集めている。

・瀬戸内国際芸術祭では、地域住民とアーティストが協働して作品を制作している。例えば、漁網を使った作品づくりでは漁師の方々も参加し、これまで文化芸術に関わる機会の少なかった人々が参加することで、地域のつながりが生まれて街の賑わいや活気に

もつながっている。

■3 都市の連携

【金沢市】

・金沢では 4 年生、丸亀では 3 年生を対象に招待鑑賞を行うなど、地域ごとに異なる取組があるので、お互いの良い点や課題を共有し、若手アーティスト支援なども含めて、情報交換の場を持てるとよい。

■まとめ

【モデレーター】

・文化とは「その土地を耕すこと」であるという岡本太郎の言葉を思い出した。皆さんの活動は、それぞれの土地を独自の方法で耕し、地域とともに新しい創造社会を築いていく取り組みだと感じる。

・「何もない」と嘆くのではなく、あるものを生かし、新しい発見を積み重ねる中で、新しい企画が生まれるのではないか。

【高松市】

・「瀬戸内国際芸術祭」の秋会期中であり、ぜひ子どもと一緒に訪れて楽しんでほしい。

【神戸市】

・優しい街になってほしい。チャレンジに寛容な街になれば、失敗を恐れず挑戦し続けることができ、それが未来をつくる力になる。

【金沢市】

・大人が楽しそうに動いている街には希望があり、大人が面白がる姿を見た次の世代に創造性が生まれるのではないか。

３．総括

／佐々木雅幸氏（大阪市立大学名誉教授／CCNJ 顧問）

・神戸市のユネスコ創造都市の推進に関しては申請時点から支援し、旧生糸検査所の払い下げから指定管理者選定まで関わった。以後 10 年間は審査委員長として事業評価を担当した。特に「ちびっこうべ」は高く評価している。

・加盟都市は 4 年ごとに UNESCO にモニタリングレポートを提出する義務があるので、「ちびっこうべ」事業は子どもへの影響をデータで詳細に把握して継続的に検証することが大変重要だ。

・金沢大学で 15 年勤務した際、山出保市長とともに創造都市金沢の方向性を議論した。特に 21 世紀美術館の成功の前提となったのは、1997 年設立の金沢市民芸術村であり、旧紡績工場をリノベーションして、24 時間 365 日開放する市民主体の芸術拠点をつくったことが大きな成果を上げた。市民ディレクターによる自主管理体制のもと、演劇・音楽・アート工房が常に活動を続け、金沢の文化的成熟が見られたことから、金沢市は

伝統と革新を両立させる都市文化政策へ転換した。

・21 世紀美術館は市の中心部に建築され、現代アートと都市の再生を進めた拠点施設だ。初代館長の蓑氏は「鑑賞者を育てる」ことを重視し、初年度は全小中学生を招待し生の芸術に触れる機会を提供した。のちに 4 年生対象のミュージアム・クルーズとして定着し、高い成果を上げた。

・創造都市の成功には市長や経済界、市民の成熟度に加え、拠点施設の持続的発展が不可欠だ。伝統は時代ごとの先端の積み重ねによって形成されるため、現代アートへの投資を怠れば文化は停滞し凝り固まってしまう。金沢は伝統と先端の融合を実証した良い例である。

・文化芸術の社会的効果を明らかにするためには、緻密なデータ収集が重要であり、AI 時代においては、地域住民の生活レベルにある細かいデータを収集し、市民に還元・可視化する「ローカル LLM」が 21 世紀の創造都市の知のインフラとなる。

・2012 年より高松市創造都市推進審議会会長を務め、子どもを中心に据えた創造都市づくりを推進してきた。三井氏のプロジェクトの発展が高松市の創造都市としての成否を決めると考えて、保育園での芸術活動の拡充を支援してきた。芸術士協会も設立され、幼児のアート教育の重要性について社会的認知を高めることは重要であり、高松方式が全国のスタンダードとなることを期待している。

【交流会・エクスカーション】

１．交流会

開催日時：令和 7 年 10 月 16 日（木）18：30～20：30

会　　場：神童ろ（わらじろ）

２．エクスカーション

開催日時：令和 7 年 10 月 17 日（金）

プログラム：瀬戸内国際芸術祭を視察（女木島・男木島）